



きじむんの どう〜ちゅいばにい〜 古文書入門編

第2回 古文書の言語

キーワード：満州語 漢文 国字

はいさーい！ きじむんやいびーん。新入生の皆さん大学生活はどうか？附属図書館3階ホールで開催中の図書館おススメ本「Let's enjoy! 琉大ライフ♪」のコーナーは新生活にお役立ちの情報が満載♪ そちらもぜひ見に来てね！さて、今回は、附属図書館が所蔵する貴重資料に使われている文字や言語を紹介しますよ～！

・古文書で使用されている言語

附属図書館所蔵の貴重資料にはいろんな言語の文字が使われています。実際の文書と一緒に見ていきましょう。

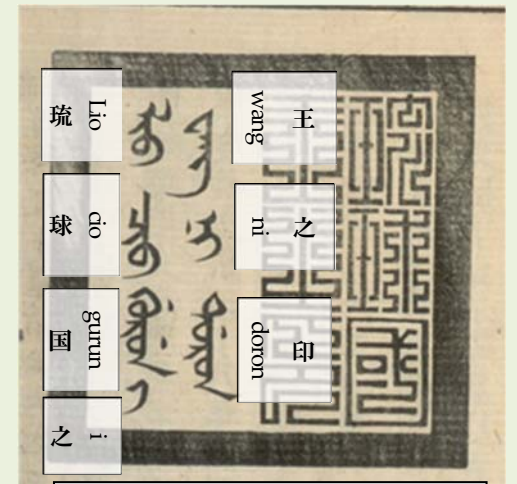
○日本語：琉球国内の公式文書、薩摩（日本）への文書については日本語で書かれていました。例えば、『薩琉往復文書集 琉球館文書』（仲原善忠文庫 No.1-4）は、鹿児島島の琉球館における薩摩側との交渉の様子が記録された資料です。このほか、附属図書館の古文書の大部分は日本語で書かれています。



『薩琉往復文書集 琉球館文書』巻4
(仲原善忠文庫 No.4)

○中国語：琉球において、中国や朝鮮・東南アジアに向けた外交文書はすべて中国語（漢文）で書かれていました。琉球には、中国語（官話）に長け、通事として対中国外交を担う久米村人（クニンダンチュ）がいました。また、八重山等の地方においても、中国や朝鮮の漂流難民の対応のために中国語の習得が必要でした。中国語ができることや漢字が書けることによって、もし言葉の通じない場所に漂着しても意思疎通を図ることができました。例えば、宮良殿内文庫 No.43 の「漢文集」は、八重山の地方役人が、中国に漂流した場合に現地の役人などのようにコミュニケーションを図ろうとしたかがわかる資料です。

○満洲語：琉球国が朝貢していた清朝は、満洲族の王朝だったため、本来は満洲語が公式な言語でした。漢文でかかれた琉球国王から中国皇帝への上奏文は、清朝の内閣で満洲語に翻訳され、満洲語・漢語の併用による正式な文書となって皇帝に奉じられました。『中山伝信録』巻2（伊波文庫 No.18）の31 ページには、乾隆 21(1756)年より前に使用された琉球国王印が掲載されています。清代の中国皇帝から賜った琉球国王の印には漢文と満洲語が併記されていました。



『中山伝信録』巻2（伊波文庫 No.18）より「琉球国王之印」（満洲語は左から右への縦書き）

○琉球の国字：「畑」「辻」が日本で作られた漢字（和製漢字）であるように、琉球にも独自の漢字（国字）があります。現在的那覇市小祿宮城の古い地名である卒宮城（ぐしみやぎ：グシナーグシク）の「卒（グシ）」は琉球で作られた国字です。宮良殿内文庫 No.3 「万集」27 ページに卒宮城の地名が記述されています。このほか、琉球の国字には主に人名で使用される「瓊（キョ）」や、農具を指す「鉾（ヘラ）」等があります。

○その他：漢籍（前近代に発行された中国書）を読む際に、象牙や竹などで作られたペンで、墨を使わずに書物の書面に文字や訓点を書込む方法があります。これを「角筆（かくひつ）」といい、写真やコピーでは映らず、肉眼でのみ確認できます。本学所蔵の漢籍の一部には角筆による書込みがあります。

「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」では、いろんな言語で作成された貴重資料を見ることができるよ。QR コードからリンクできるので是非アクセスしてね！（CT）



参考文献：新城敏男「近世八重山土族の異国語習得」（『首里王府と八重山』2014 年，岩田書院），黨武彦「清代文書行政における内閣の政治的機能について—日本・琉球関係档案を素材として」（『東京大学史料編纂所研究紀要』No.16, 2006 年）